

37 中国医学と道教 (XIII 日本古代史から)

吉元昭治

今回は、中国医学と道教との関係を我が国の古代に求めてみることにした。ここでいう古代とは、『古事記』および『六国史』の神話時代から光孝天皇、仁和三年(八八七年)までとした。

すでに、日本古代の記述のなかに、道教の影響があることについては多くの業績があるが、これらをふまえて道教医学の見地から眺めると重要な事柄が数多くあることが判明した。道教的養生術がいかに古人の心をとらえていたかについてのべたい。枚数の関係もあるので、年代順にその項目をあげ、そのうち重要な事柄について総会でのべることにする。

伊邪那美命と伊邪那岐命の黄泉の国での桃のはなし。三輪山伝説における魔よけとしての赤土はに。田道間守の常

世の国に木の実をとりに行く大旅行(垂仁天皇)。浦島太郎の物語(雄略天皇)。薬獬くすりがり(推古天皇)。蜂の巣の百濟からの献上と飼育(皇極天皇)。芝草(皇極天皇)。常世の神の信仰(皇極天皇)。天武天皇の名、天淳中原あまのぬなはら瀨真人せまのまひと。白朮煎(天武天皇)。持統天皇の吉野行幸、鉛粉、醴こまけ泉いづみ(持統天皇)。文武天皇の献上品。役君小角えのきみの流謫(役行者。文武天皇)。元明天皇の献上品。行基についての詔(元正天皇)。養老の滝(元正天皇)。正倉院にのこる薬物(孝謙天皇)。丹生川上神(丹生という地名、称徳天皇など)。医師として読むべき医書(孝謙天皇)。和氣清麻呂の伝説(桓武天皇)。仁明天皇と松実。巫部の氏姓(仁明天皇)。薬玉(仁明天皇)。仁明天皇と石薬の服用。虎主と地黄(清和天皇)。清和天皇の長生久視の祈り。常世の神の神社(陽成天皇)などの事実がのっている。さらに

長屋王事件。天武天皇の孫、左大臣長屋王は聖武天皇、天平三年、左道を学び、国を傾けようとしたとして死に致った。左道とは道教的方術で、厭魅えんみを行うことである。聖武天皇は「厭魅・呪咀・符をかく、薬をあわせて毒をつくり、またはこれを習い、またはその書を持つものが

あれば死罪に処す」という強い詔を下しているが、その後、称徳天皇の時の犬養姉女、光仁天皇皇后の井上内親王、さらには難波内親王も巫蠱事件に連座したとされ、流されたり、廃位されられたりして、この種の事件が続発している。このような情況から、『令義解』（淳和天皇）のうちに見られる典藥寮（宮内省管轄）の咒禁科は漸次衰退し、陰陽寮（中務省管轄）に組み入れられ、つづく平安朝時代の陰陽師の活躍となっていく。

一方、仏教の興隆とともに、道教的方術・咒術はかけをひそめ、医療を荷うものは巫医の姿から僧医が中心となっていく。典藥寮のうちに医・鍼・按摩・葉園を司る職務システムと同時に、咒禁科という全く方術的なものがあつたことは、何よりも当時の道教的影響が強かつたことを物語っている。

この後、約百年たつて隋唐医学の影響が濃い『医心方』が誕生したが、なおこの書も方術的な方面が濃いことはよく知られている。

以上のべた記録も、神仙譚あり、石薬・丹の服用あり、呪咀があつたり、現世利益の色あい濃いことが分る。

こうみると古代を見ると、中国（初期では朝鮮）の影響を考えないと全く理解しえないものがあり、奈良時代に編纂された『記紀』も多くこの間の事情をしるしている。また壬申の乱以後の献上品リスト、持統天皇が何故在位の間三十一回（それ以外に三回）吉野に行幸し、諫奏をおしてまで伊勢に行ったのか。また仁明天皇の明らかかな石薬の服用、正倉院に残る薬物などは何を物語っているのだろうか。これらを中心として発表するつもりである。なお古代を通してこの間の詳しいことは別途、出版準備中である。

（順天堂大学産婦人科）